

なつめ そうせき
夏目漱石

夏目漱石 一八六七（慶応三）—一九一六（大正五）年。小説家・英文学者。東京都生まれ。『坊っちゃん』『三四郎』『門』など、鋭い文明批判の精神によって独自の文学を打ち立てた。この作品は一九一四年に発表されたもので、本文は「漱石全集」第六巻によった。

東京の学校で学ぶ地方出身の青年が、ある夏、海岸で見いだした中年男性を「先生」と呼び、以後交際を重ねるうちに、人生の師として慕うようになった。やがて大学卒業後、故郷で重病の父を看病していた青年のもとに「先生」からの遺書が送られてくる。青年は危篤の父を置いて、東京行き汽車に飛び乗った。遺書には「先生」の生い立ちと、自殺を覚悟するに至った事情が述べられていた。ここに採ったのは、その遺書の一部である。

資産家の両親を相次いで失った「私」（「先生」）は、叔父による遺産管理のもと、上京し高等学校に通う。同郷の友人Kと同居し、学校生活を送ったが、故郷の叔父が遺産をごまかしていたことを知り、財産を整理して故郷を捨てる。その後、財産を手に入れた「私」はKと離れ、素人下宿から大学に通うようになった。その家には軍人の未亡人である奥さんとそのお嬢さんがおり、「私」は次第に、人を疑う気持ちをもちながらも、お嬢さんに対してひそかな恋心を抱くようになった。

Kは寺の次男で、医者之家に養子に出され、養家の資金で東京の高等学校に通っていた。「私」と同じ大学に進学するにあたり、養家の意向に反して別の道を進んでいることを自ら告げたため、Kは養家からも実家からも見放され、学資が途絶える。自活して、生活苦に耐えながらも自分の道を進みはじめるKの窮状を見た「私」は、奥さんを説得して、自分の下宿に同居するようにはからい、物心両面から支援する。Kの大学生活は安定するが、「私」はKとお嬢さんとの親しみが増すにつれて、嫉妬心に苦しみむようになっていった。

大学卒業の年の正月、Kは「私」の部屋にやってきて、折から外出している奥さんとお嬢さんのことを、あれこれ質問してやめようとしな

Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話をやめませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入ったことまで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私のほうから二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の変わっているところに気がつかずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんなことばかり言うのかと彼に尋ねました。その時は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が震えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何か言おうとすると、言う前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するようにたやすく開かないところに、彼の言葉の重みも籠もっていたのでしよう。いったん声*が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちょっと眺めた時、私はまた何か出てくるなとすぐ感じたのですが、それがはたしてなんの準備なの

か、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

その時の私は恐ろしさの塊と言いましようか、または苦しさの塊と言いましようか、なにしろ一つの塊でした。石か鉄のように頭から足の前までが急に堅くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなったのです。幸いなことにその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐしまったと思えました。先を越されたなと思えました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起こりません。おそらく起こるだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味の悪い汗がシャツにしみとおるのをじっと我慢して動かずにいきました。Kはその間いつもの

❶ 「不思議の感に打たれ」たのはなぜか。

— *口を破る

とおり重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けてゆきます。私は苦しうってあまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上にはつきりした字で貼り付けられてあったらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気がつかないはずはないのです

が、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのです。彼の自

白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くてのろい代わりに、とても容易なことでは動かせないという

感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えずかき乱されていきましたから、細かい点になるとほとんど耳へ

入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前言った苦痛ばかりでなく、時には一種の恐ろしさを感じるようになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の

念がきざし始めたのです。

Kの話がひととおり済んだ時、私はなんとも言うことができませんでした。こっちも彼の前に同じ意味の自白をし

こっちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖ふすまを開けて向こうから突進してきてくれればよいと思いました。私に言わせれば、さつきはまるで不意打ちにあったのも同じでした。私にはKに応ずる

準備も何もなかったのです。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下心を持っていました。それで時々目を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまでたっても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

そのうち私の頭はだんだんこの静かさにかき乱されるようになってきました。Kは今襖の向こうで何を考えているだろうと思うと、それが気になってたまらないのです。普段もこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合

っている場合は始終あったのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見な

たものだろうか、それとも打ち明けずにいるほうが得策だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も言えなかったのです。また言う気にもならなかったのです。

昼飯の時、Kと私は向かい合わせに席を占めました。下女に給仕をしてもらって、私はいつにないまずい飯を済ませました。二人は食事中もほとんど口をききませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分かりませんでした。

*

二人は各自の部屋めいめいに引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かなことは朝と同じでした。私もじっと考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いましたが。しかしそれにはもう時機が遅れてしまったという気も起こりました。なぜさつきKの言葉を遮って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手ばかりのように見えてきました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思うとおりをその場で話してしまつたら、まだよかつたらうにとも考えました。Kの自白に一段落がついた今となって、

ければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開けることができなかつたのです。いったん言いそびれた私は、また向こうから働きかけられる時機を待つよりほかにしかたがなかつたのです。

しまいに私はじっとしておられなくなりました。無理にじっとしていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。

私はしかたなしに立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、なんとという目的もなく、鉄瓶の湯を湯飲みについて一杯飲みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの部屋を回避するようにして、こんなふうに分を往来

の真ん中に見いだしたのです。私には無論どこへ行くというあてもありません。ただじっとしていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き回ったのです。私の頭はいくら歩いてもKのことではないになっていました。私もKを振るい落とす気で歩き回るわけではなかつたのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀嚼そじやくしながらうろついていたのです。

私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんなことを突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないければいけないほどに、彼の恋が募ってきたのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強いことを知っていました。また彼の真面目なことを知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くを持つていると信じました。同時にこれから先彼を相手にするのが変に気が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の部屋にじっと座っている彼の容貌を始終目の前に描き出しました。しかもいくら私が歩いてても彼を動かすことはとうていできないのだという声はどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物^⑧のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇^たられたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れてうちへ帰った時、彼の部屋は依然として人気がないように静かでした。

*

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いと言ったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦^{そば}湯を持ってきてくれました。しかし私の部屋はもう真っ暗でした。奥さんはおやおやと言って、仕切りの襖を細目に開けました。ランプの光がKの机から斜めにぼんやりと私の部屋に差し込みました。Kはまだ起きていたものと見えます。奥さんは枕元に座って、おおかた風邪を引いたのだらうから体を暖める^{あたた}がいいと言って、湯飲みを顔のそばへ

私がうちへ入ると間もなく俾^{しんま}の音が聞こえました。今のように護謨輪^{ゴムカ}のない時分でしたから、がらがらいう嫌な響きかかなりの距離でも耳に立つのです。俾はやがて門前で止まりました。

私が夕飯^{ゆうめし}に呼び出されたのは、それから三十分ばかりたった後のことでしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴れ着が脱ぎ捨てられたまま、次の部屋を乱雑に彩っていました。二人は遅くなると私たちにすまないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰ってきたのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とにとってほとんど無効も同じことでした。私は食卓に座りながら、言葉を惜しがる人のように、そっけない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言^{くわげん}でした。たまに親子連れで外出した女二人の気分が、また平生よりはすぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおのこと目につきます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪いのです。すると今度はお嬢さんがKと同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口がききたくないからだと言いま

突きつけるのです。私はやむを得ず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗い中で考えていました。無論一つ問題をぐるぐる回転させるだけで、他になんの効力もなかったのです。私は突然Kが今隣の部屋で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向こうでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖越しに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問いました。今度はKの答えがありません。その代わり五、六分たったと思う頃に、押し入れをがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがてランプをふっと吹き消す音がして、うちじゅうが真っ暗なうちに、しんと静まりました。しかし私の目はその暗い中でいよいよさえてくるばかり

⑧ 1俦 人力車。当初は木輪だったが、しだいにゴム輪のものが普及した。一九二ページ参照。
⑧ 「魔物のように思えた」のはなぜか。

（容貌）（寡言）
*やむを得ず

です。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いたことについて、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこっちから切り出しました。私は無論襖越しにそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即座に得られることと考えたのです。ところがKはさっきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはっと思わせられました。

10

*
Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現れていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色をけっして見せませんでした。もつとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんがそろって一日うちを空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち着いて、そういうことを話し合うわけにもいかないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果初めは向こうから来る

15

の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上⁵の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じことをこும்取り、ああも取りしたあげく、ようやくここに落ち着いたものと思ってください。さらにむずかしく言えば、落ち着くなどという言葉は、この際けっして使われた義理でなかったのかもしれない。

5

そのうち学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立ってうちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見ると私は、なんにも前と違ったところがないように親しくなったのです。けれども腹の中では、各自に各自のことを勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、

15

のを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこっちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙ってうちのものの様子を観察してみました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振りにも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは確かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会をこしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにするほうがよからうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにととしておくことにしました。

10

こう言つてしまえばたいへん簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満ち干と同じように、いろいろの高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現れているとおりのだろうかと疑つてもみました。そうして人間

15

この問いに対する彼の答え次第できめなければならぬと、私は思つたのです。すると彼は他の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察どおりだったので、内心うれしがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にもかなわないという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資のことで養家を三年も欺いていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損なわれていなかったのです。私はそれがためにかえつて彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起こりようがなかったのです。私はまた彼に向かつて、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、なんにも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。私は彼に隠し立て

15

4 「はっと思わせられ」たのはなぜか。
5 「盤上」の数字を指し得るものだろうか」とはどのようなことか。

— (談話) (生返事) (挙動)
(明瞭) (肉薄) (横着)

をしてくれるな、すべて思ったとおりを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないとはつきり断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。私も往来だからわざわざ立ち止まってそこまで突き止めるわけにいきません。ついそれなりにしてしまいました。

*

ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓からさす光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引つ繰り返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べてこいと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見つからないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと目を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。ご承知

総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際のの方面へ向かってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向かつて、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくをはばかり弱くできあがってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んでゆくだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸のうちに彫り付けられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

2 竜岡町 東京都文京区にあった町名(当時は東京市本郷区)。 3 池の端 東京都台東区上野・不忍池の池畔一帯。
4 上野の公園 上野恩賜公園(当時は東京市下谷区)。 5 養家事件 「K」が養家の方針にさからって医学の道に進まず、文科系の大学へと通っていたことが明らかとなり、離籍された事件のこと。七四ページ参照。
6 「思ったとおりを話してくれと頼」んだのはなぜか。
7 「一種変な心持ちがし」たのはなぜか。

のとおり図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をするわけにはゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通のことなのですが、私はその時に限って、一種変な心持ちがしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べもあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から離しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待ってあげればしてもいいと答えました。彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。なんだかKの胸に一物があつて、談判でもしにこられたように思われてしかたがないのです。私はやむを得ず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち着き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すとともに、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったもので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向こうから口を切りました。前後の様子を

私がKに向かつて、この際なんで私の批評が必要なかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分からなくなってしまうので、私に公平な批評を求めるよりほかにしかたがないと言いました。私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一步先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨のごとく注いでやったか分かりません。

(所作) (談判) (漠然)
(慈雨)
*胸に一物がある

私はそのくらいの美しい同情を持って生まれてきた人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

*

私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の目、私の心、私の体、すべて私という名のつくものを五分の隙間もないように用意して、Kに向かったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の目の前でゆっくりそれを眺めることができたのも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ちで彼を倒すことができるだろうという点にばかり目を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだのです。私は彼に向かって急に厳肅な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感じる余裕はありませんでした。私は

まず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ。」と言い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使ったとおりを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ではありません。私は復讐以上に残酷な意味を持っていたというのを自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行く手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生まれた男でした。しかし彼の傾向は中学時代からけっして生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんなことを言う資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女に關係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠もっているのだろうと解釈していました。

しかし後で實際を聞いてみると、それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なので、摂欲や禁欲は無論、たとひ欲を離れた恋そのものでも道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分

に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのです。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑のほうが余計に現れていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けてきているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kにとって痛いには違いなかったのです。しかし前にも言ったとおり、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今までどおり積み重ねてゆかせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ。」



当時の本郷周辺略図

6 房州 千葉県南部、旧国名・安房の異称。 7 真宗寺 浄土真宗の寺。浄土真宗は、親鸞(一一七三—一二六二)を開祖とする仏教の一派。妻帯を認め、自力の修行によらず阿弥陀仏の本願の力にすがること説く。

(厳肅) (滑稽) (残酷)
(宗旨) (精進) (侮蔑)

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上はどう影響するかを見つけていました。

「馬鹿だ。」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ。」

Kはびたりとそこへ立ち止まったまま動きません。彼は地面の上を見つめています。私は思わずぎょっとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしても彼の声がいかに力に乏しいということに気がつきました。私は彼の目遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので。そうして、そろそろとまた歩き出しました。

*

私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せと言ったほうがまだ適当かもしれません。その時の私はたといKをだまし打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私のそばへ来て、おまえは卑怯だと一言ささやいてくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち返ったかもしれません。もしKがその人であつたなら、私は

たければ、やめてもいいが、ただ口の先でやめたってしかたがあるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いったい君は君の平生の主張をどうするつもりなのか。」

私がこう言った時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話すとおりすこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、けっして平気でいられないたちだったのです。

私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は突然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだなんとも答えられない先に「覚悟、——覚悟ならぬこともない。」と付け加えました。彼の調子は独り言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川の宿のほうに足

15

おそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私をたしなめるにはあまりに正直でした。あまりに単純でした。あまりに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払うことを忘れて、かえってそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私のほうを見ました。今度は私のほうで自然と足を止めました。するとKも止まりました。私はその時やっとKの目を真向きに見ることができたのです。Kは私より背の高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼のごとき心を罪のない羊に向けたのです。「もうその話はやめよう。」と彼が言いました。彼の目にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちょっと挨拶ができなかったのです。するとKは、「やめてくれ。」と今度は頼むように言い直しました。私はその時彼に向かつて残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の喉笛へ食らいつくように。

「やめてくれて、僕が言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめ

を向けました。わりあいに風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬のことですから、公園の中は寂しいものでした。ことに霜に打たれて青みを失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べてそびえているのを振り返って見た時は、寒さが背中へかじりついたような心持ちがしました。我々は夕暮れの本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向こうの岡へ登るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温かみを感じ出したくらいです。

急いだためでもありませんが、我々は帰り道にはほとんど口をききませんでした。うちへ帰って食卓に向かった時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何もありませんが、た

15

8小石川 東京都文京区の一部。同区は当時、東京市小石川区・本郷区の二区に分かれていた。
川、東は上野・谷中に接する一帯の台地。

9「平生の主張」とはどのようなものか。

9本郷台 西は小石

（刹那）（喉笛）（萎縮）

（卒然）

*目がくらむ

だ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、ろくな挨拶はしませんでした。それから飯を飲み込むようにかき込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の部屋へ引き取りました。

*

その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があつたからです。彼はそのため今日まで生きてきたと言つてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かつて猛進しないと言つて、けつしてその愛の生ぬるいことを証拠立てるわけにはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければ

くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かつて、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きていますかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は普段よりもかえつて落ち着いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の部屋はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になつて、昨夕のことを考えてみると、なんだか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思ひました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kは確かに襖を開けて私の名を呼んだと言ひます。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはつきりした返

ならなくなるのです。その上彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰つた晩は、私にとつて比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうして取りとめもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声には確かに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の部屋に帰りました。他のことにかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持つていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだあかりがついているのです。急に世界の変つた私は、少しの間口をきくこともできずに、ぼうつとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅事もしません。調子の抜けた頃になつて、近頃は熟睡ができるのかとかえつて向こうから私に問うのです。私はなんだか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていっしょにうちを出しました。今朝から昨夕のことが気にかかつている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかつたのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はどうやめよう。」と言つたではないかと注意することくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持つた男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑え始

10尺 長さの単位。一尺は、約三〇センチメートル。

④ 「この双方の点」とは何をさすか。

⑤ 「妙な力で私の頭を抑え始めた」とはどのようなことか。

— (覚醒) (猛進) (暗闇)

(熟睡)

めたのです。

*

Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちゃんと飲み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかりつらまえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら動き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとつて例外でないのかもしれないと思いついたのです。すべての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に畳み込んでいるのではなからうかとうたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私

がもしこの驚きをもって、もう一遍彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかったかもしれませぬ。悲しいことに私はめっかちでした。私はただKがお嬢さんに対して進んでゆくという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすな

わち彼の覚悟だろうといちずに思い込んでしまったのです。私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟をきめました。私は黙って機会をねらっていました。しかし二日たっても三日たっても、私はそれをつらまえることができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといったふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ。」と思う好都合が出てきてくれないのです。私はいらいました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を遣いました。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起さろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで布団をかぶって寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなつて、家の中がひっそり静まった頃を見計らって寝床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物枕元へ運んでやるから、もっと

寝ていたらよかろうと忠告してくれました。体に異状のない私は、とても寝る気にはなれませぬ。顔を洗つていつものとおり茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片づかない茶碗を手に持ったまま、どんなふうの問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分がよくない病人らしく見えただらうと思えます。

私は飯をしまつてたばこを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきませぬ。下女を呼んで膳を下させた上、鉄瓶に水をさしたり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですと聞き返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言

11つらまえた つかまえた、の意。 12めっかち 物事が十分に見えていないことのとえ。現在では、不適切な表現として使われなくなっている。

「Kが近頃何か言いはしなかったか」と聞いたのはなぜか。

10

いました。奥さんはなんですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私はしかたなしに言葉の上で、いい加減にうろつき回つた末、Kが近頃何か言いはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いもよらないというふうをして、「何を？」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか。」とかえつて向こうで聞くのです。

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のない私に、Kは、「いいえ。」と言ってしまった後で、すぐ自分のそを快からず感じました。しかたがないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではない

10

（果断）（催促）（屈託）
*色を失う

のだと言い直しました。奥さんは「そうですか。」と言って、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にください。」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでもしばらく返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていません。「ください、ぜひください。」と言いました。「私の妻としてぜひください。」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃありませんか。」と聞くのです。私が「急にもらいたいのだ。」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか。」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のようにきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合にはたいへん

底にはい込んできたくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は屋頂また茶の間へ出かけて行って、奥さんに、今朝の話をお嬢さんについて通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというようなことを言うのです。こうなるとなかんだか私よりも相手のほうが男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き止めて、もし早いほうが希望ならば、今日でもいい、稽古から帰ってきたら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらおうほうが都合がいいと答えてまた自分の部屋に帰りました。しかし黙って自分の机の前に座って、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、なんだか落ちて着いていられないような気もするのです。私はとうとう

心持ちよく話のできる人でした。「よござんす、さしあげましょう。」と言いました。「さしあげるなんて威張った口のきける境遇ではありません。どうぞもらってください。ご存じのとおり父親のない哀れな子です。」と後では向こうから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんはなんの条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえって形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」と言いました。

自分の部屋へ帰った私は、事のあまりにわけもなく進行したのを考えて、かえって変な気持ちになりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の

帽子をかぶって表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。なんにも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかなかったのです。私が帽子をとって「今お帰り。」と尋ねると、向こうではもう病気は治ったのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ治りました、治りました。」と答えて、ずんずん水道橋のほうへ曲がってしまいました。

私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町のほうへ曲がりました。私がこの界隈を歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手ずれのした書物などを眺める気が、どうしても起こらないのです。私は歩きながら絶えずうちのことを考えていました。私にはさっきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんがうちへ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもの

13 水道橋 東京都文京区と千代田区の境を流れる神田川に架かる橋。またその一帯の地名。14 猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町のほうへ いずれも東京都千代田区にある町名。神保町を中心に古書店が集中している。
15 「本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」という発言から何が想像できるか。

（頓着）（境遇）（拘泥）
*手ずれのした

で歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真ん中で我知らずふと立ち止まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。またある時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区にまたがって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKのことを考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみてもいっこう分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私がうちの格子を開けて、玄関から座敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の部屋を抜けようとした瞬間でした。彼はいつものとおりに向かって書見をしていました。彼はいつものとおりの書物

奥さんに尋ねました。奥さんはおおかたきまりが悪いのだろうと言って、ちょっと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、何できまりが悪いのかと追窮しにかかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見ます。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔つきで、事の成り行きをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それをことごとく話されてはたまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいのことを平気とする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して部屋へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私はいろいろの弁護を自分の胸でこしらえ

から目を離して、私を見ました。しかし彼はいつものとおり今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、謝りたくなったのです。しかも私の受けたその時の衝動はけっして弱いものではなくったのです。もしKと私がたつた二人曠野の真ん中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪しようと思えます。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い止められてしまったのです。そうして悲しいことに永久に復活しなかったのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合わせました。なんにも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い目を私に向けません。なんにも知らない奥さんはいつもよりうれしそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなど同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の部屋でたぐいと答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと

てみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向かうには足りませんでした。卑怯な私はいかに自分で自分をKに説明するのが嫌になったのです。

私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえなんとかしなければ、彼にすまないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突つくように刺激するのですから、私はなおつらかったのです。どこか男らしい気性をそなえた奥さんは、いつ私のことを食卓でKにすっぱぬかないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私はなんとかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせ

15万世橋 東京都千代田区にあり、神田川に架かる橋。 16明神の坂 神田明神を通る坂のこと。万世橋から本郷台に通ずる。 17菊坂 本郷台から小石川に抜ける途中にある坂。 18この三区 当時の東京市神田区（現在の東京都千代田区の一部）・本郷区・小石川区をさす。

19「私の自然」とは何か。

（時分）（回顧）（書見）
*我知らず

なければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点を持つてみると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難のこのように感ぜられたのです。

私はしかたがないから、奥さんに頼んでKに改めてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目のないのに変わりはありません。と言って、こしらえごとを話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるにきまっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前にさらけ出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な道を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついていっているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一步前へ踏み出

聞かせてくれました。

奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち着いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうすかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んでください。」と述べた時、彼は初めて奥さんの顔を見て微笑を漏らしながら、「おめでとつございます。」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか。」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げるのができません。」と言ったそうです。奥さんの前に座っていた私は、その話を聞いて胸が塞がるような苦しさを感じました。

*

勘定してみると奥さんがKに話をしてからもう二日あまりになります。その間Kは私に対して少しも以前と異な

そうとするには、今滑ったことをぜひとも周囲の人に知らなければならぬ窮境に陥ったのです。私はあくまで滑ったことを隠したがりませんでした。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ちすくみました。

五、六日たった後、奥さんは突然私に向かって、Kにあのことを話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私をなじるのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で私が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは。」

私はKがその時何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かいことを尋ねずにはいられません。奥さんはもとより何も隠すわけがありません。大した話もないがと言いながら、いちいちKの様子を語って

た様子を見せなかったもので、私は全くそれに気がつかずいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼のほうがはるかに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ。」という

感じが私の胸に渦巻いて起こりました。私はその時さぞKが軽蔑していることだろうと思って、一人で顔を赤らめました。しかし今さらKの前に出て、恥をかかせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進むうかよそうかと考えて、ともかくも明るる日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すとぞっとします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かもしれませぬ。私は枕元から吹き込む寒い風でふと目を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の部屋との仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いてい

④「倫理的に弱点を持つてい」るとはどのようなことか。

一（面目）（詰問）（窮境）

ます。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘

を突いて起き上がりながら、きつとKの部屋をのぞきました。ランプが暗くともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛け布団はね返されたように裾のほうに重なり合っているのです。そうしてK自身は向こうむきに突っ伏しているのです。

私はおいと行って声を掛けました。しかしなんの答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの体はちっとも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。そこから彼の部屋の様子、暗いランプの光で見回してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の目は彼の部屋の中を一目見るや否や、あたかもガラスで作った義眼のようになり、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみまわりました。それが疾風のごとく私を通過したあとで、私はまたああしまったと思いました。もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわ

る全生涯をものすごく照らしました。そうして私はがたがた震え出したのです。

それでも私は¹⁶ついに私を忘れることができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に目を着けました。それは予期どおり私の名宛てになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したようなことはなんにも書いてありませんでした。私は私にとってどんなにつらい文句がその中に書き連ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの目に触れたら、どんなに軽蔑されるかもしれないという恐怖があったのです。私はちよつと目を通しただけで、まず助かったと思えました。(もとより世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行でとうてい行く先の望みがないから、自殺するということだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片づけ方も頼みたいという言葉

葉もありました。奥さんに迷惑をかけてすまんからよろしくわびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要なことはみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだということに気がつきました。しかし私の最も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく

く見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだらう」とはどのようなことか。

16 「私」の「K」に対するどのような思いが表れているか、考えなさい。

—〈疾風〉〈血潮〉—

理解 (1) 精神的に向上心のないものは馬鹿だ。「(八四・下)」という発言には「私」の「K」に対するどのような思いが表れているか、考えなさい。

(2) 覚悟、——覚悟ならぬこともない。「(八七・上12)」という発言をめぐって、「私」の考えはどのように変化していったか、まとめなさい。

(3) 「仕切りの襖が、この間の晩と同じくらい開いている」(九七・下17) たのはなぜか、考えなさい。

(4) 「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだらう」(九九・下1) ということには、「K」のどのような気持が込められているか、説明しなさい。